
康介の饅頭

新尾林月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

康介の饅頭

【Zコード】

Z5312A

【作者名】

新尾林月

【あらすじ】

病気の父のために、饅頭を買いに行つた康介。彼が生まれる前に、菓子職人と両親との間には隠された過去があつた。

康介が通っている学校の近くに、和菓子屋があつた。急いで買い物をしているときなどは、見落としてしまうような、小さくて地味な店だ。

それでも、康介の父が子供の頃からそこにあつたというから、案外儲かっているかもしない。ときおり見かける客は、高価そうな身なりの女性や、太った中年。金を持っていそうなひとばかりだった。

康介の父は自動車の修理工で、ふつうのサラリーマンよりも給料は少なかつたが、ふた月に一度ぐらいは、その店の印が入った箱をお土産に持つてきてくれることがあった。

そのたびに父は、こここの饅頭が県内でいちばん、いや、日本一ないと、まるで自分のことのように誇らしげに語っていた。

たしかに、藤色の箱に入った小さな饅頭はとても美味しくて、康介はいつも必ず4個は食べた。おなかが減っているときは、5個食べるときもあった。8個入りだから、康介が5個食べてしまつと、3個しか残らないのだが、父は康介が饅頭を頬張るのを嬉しそうに見つめていた。

それほど美味しい饅頭なのに、なぜか母は食べなかつた。甘いものが嫌いなわけはないのは、いつも近所の奥さんと喫茶店でケーキを食べるのに連れていかれるので、わかっている。康介が何度勧めても、母は饅頭を目にするのも嫌だというように首を振り、しまいには機嫌を損ねてしまうのだった。

そういうときには、なんとなく両親の間に流れる空氣も重たくなってしまう。康介には、父が饅頭の箱を提げて帰つてくる日が待ち遠しくもあり、また不安でもあつた。

しかし、その饅頭も、もう半年食べていない。買っててくれるるはずの父が、病気で入院しているからだ。

母はすぐに帰つてくるといつたけれど、それが嘘であることが、康介にはもうわかっている。いつ帰つてくるのかと聞いたときの両親の顔が、とても悲しげだからだ。

父はもう帰つてこないのではないだろうか。子供ながらに寒氣のようなものをおぼえて、康介の足どりは重くなるのだった。

ジャージのポケットに手を突っ込むと、小銭がちらちら音を立てた。お小遣いを使わずに貯めていたのだ。8個入りの箱は無理でも、康介と父のぶんの2個ぐらいなら買えるだろう。

いつものように見舞いに行つた日、母が花瓶の水を換えに席をはずし、病室に父とふたりきりになつた。

康介はポケットに入つていたチョコレートをひとつそり父に渡すつもりだったのだが、その前に父がぽつりと呟いたのを聞いて、ポケットから手を出すことができなくなつてしまつた。

なにげない独りごとのつもりだったのかもしない。しかし、乾いてかさかさになつた脣が振動したのを、康介は見逃さなかつた。

あの店の饅頭が食いたいなあと、父はいつたのだ。

母に頼もうと思ったが、やめておいた。どういうわけか、母はあの店の饅頭が気に入らないようだつたし、父が入院してからは、近所のスーパーにパートに出るようになり、いつも忙しそうで、とてもそんなことを頼める雰囲気ではなかつた。

しかし、康介はどうしても父にあの饅頭を食べさせてやりたかった。おやつを我慢するのはつらかつたし、母に嘘をついているうしろめたさもあつたが、なんとかこうして、お小遣いを持つて店にやつてきた。

扉を開けたとたん、甘い匂いが鼻腔を擗つて、康介はついついきしてしまつた。

店はやはり小さかつたが、椅子やテーブルもなく、無駄なインテリアもないのと、小学生の康介にはますます広く感じられた。

ときどき母に連れていつてもらうケーキ屋のようにガラスのケースもなく、木の棚や机に饅頭や団子、煎餅といった菓子が並べられ

ている。菓子屋というよりも、学校の図書室のような感じだった。

男の店員がひとりいて、扉の音で顔を上げた。これも木製の大きなカウンターの向こうにいたので、康介の姿が目に入らなかつたようだつたが、すぐに気づいて、目を細めた。

「いらっしゃいませ」

康介はどぎまぎして、小さく首を縦に振つた。母といつしょにスーパーへ行くとき、同じ言葉をかけられることがあつたが、それは必ず母に向けられていたし、ずっとぞんざいだつた。こんなふうに、まつすぐ目を見て挨拶されることはない。自分がおとなになつたような気がして、康介は昂ぶりと羞恥心で頬を染めた。

やせしそうな店員さんだつた。康介の父よりもずっと年上のよう見えるし、若そうにも見える。もしかすると、店の持ち主なのかもしれない。店にはそのひとひとりだけのようだつた。さらに話しかけられたらどうしようと思つたが、店員は康介から目を離して、また屈みこんだ。康介からはよく見えないが、カウンターの向こうで商品を陳列しているようだつた。

ほつとしたようながっかりしたような妙な気分で、康介は息をついた。ようやく目的を思い出して、饅頭を探しはじめた。

店の奥まつたところにある小さな台のうえで、饅頭を見つけた。手にとろりとして、ぎくりとした。饅頭の箱の手前に白い紙が貼つてあつたからだ。滑るような字で「一個一百円」と書いてあつた。康介はそつとポケットから手を出し、小銭を数えてみた。350円しかなかつた。

康介は迷つた。ひとつだけ買つていこうかと思つたが、きっと父は康介に食べさせようとするだろう。それに、康介も、あの饅頭そつくりの匂いを嗅いで、どうしても食べたい気持ちになつていた。

康介は首を捻つてカウンターのほうをうかがつた。店員は相変わらず腰を折つた姿勢で、白い三角巾がカウンターの机からわずかに覗いているだけだつた。

咄嗟に康介は饅頭をひとつジャージのポケットに滑り込ませた。

そしてもうひとつ饅頭を手にすると、カウンターに乗せた。

店員が真っ直ぐに立つた。小柄なひとだった。背の高い母よりも小さいかもしない。饅頭を見て、康介を見た。目を細めた。

「坊ちゃん」

そんなふうに呼ばれるのははじめてだつた。康介はびきびきして店員を見上げた。

「いけませんよ」

全身の血が落ちた。康介の小さな胸が潰れそうなほど収縮した。康介は無言でポケットから饅頭を取り出し、カウンターに置いた。カウンターのうえには饅頭が2個になつたが、店員は康介から目を逸らさなかつた。

康介は俯いた。自分のしたことをよつやく理解して、いたたまれなくなつた。つかまつて、警察に連れていかれるかもしれない。そうなつたら、父を喜ばせるどころか、悲しませてしまうだろつ。そのことで、もし父の病気が悪化したらと思うと、康介の目頭は熱くなつた。

「康介くん」

いきなり店員が康介の名前を呼んだので、康介は目を丸くした。

「ぼくのことを知つているんですか」

「2丁目の日向荘の稻葉康介くんでしょう」

どういうわけか、店員は康介の家まで知つてゐるらしい。いよいよ終わりだ。康介は唇を噛んだ。

しかし、店員は目を細くしたまま、肩を丸めて康介に話しかけた。

「お父さん、どう?」

やわらかな声だつた。康介は顔を上げた。涙が零れそうになつたが、ぐつこらえた。田じろから、男は泣いてはいけないと父につくいわれていたからだ。

「じつにきなさい」

店員が手招きをして、康介はカウンターの裏にまわつた。盗みをはたらいたことに対する折檻が待つてゐるのだろうと思うと足が竦

んだが、逃げられなかつた。

暖簾をくぐると、小さな部屋があつた。甘い匂いがきつくなる。ここで菓子がつくられているのだろう。象牙色の机のうえに、菓子を伸ばす細長い棒を見つけた。その棒で尻をぶたれるのを想像して、康介は縮みあがつた。

しかし、店員は棒をそつと押し退け、代わりにサッカーボールほどの大きさの白い塊を台にのせた。一度奥に引っ込むと、小ぶりの椅子を持ってきて、台の前に置いた。

手振りで指示され、康介は椅子に上がつた。そうすると、台が胸のあたりにきて、白い塊に手が届くようになつた。

康介は手を伸ばして、塊に触れてみた。塊は饅頭の外の部分だつた。適度に弾力があつて、康介の指を押し戻す。

店員が鍋を持ってきて、饅頭のたねのそばに置いた。鍋の蓋を開けると、なかにはじゅうぶんにこされた餡がたっぷり入つていて、康介は唾を飲み込んだ。

「見ていいなさい」

店員は康介の隣に立つて、饅頭の塊を箋つた。ゴルフボール大の饅頭を左手にのせて伸ばし、右手の親指で中央を軽く圧した。できた窪みに餡を添え丸めると、懐かしいあの饅頭の姿になつた。

「やつてみて」

康介は小さく頷き、見よう見まねで饅頭を丸めた。必死ではあつたが、できたのは店員がつくつたものとは似ても似つかぬ代物だつた。不恰好に歪み、あちらこちらから餡がはみ出している。

「不器用だなあ、やつぱり」

怒っているというよりも、嬉しそうな口ぶりだつた。康介が首をめぐらせると、店員は照れたようににかんだ。

「康介くんのお父さんは、昔、この店で働いていたんだよ」

初耳だつた。それであれほど怠慢をしていたのだと思つた。

康介は店員に教わりながら、何個も饅頭をつくつた。とのぼつになつてくると、はじめの頃よりもずっと饅頭らしいかたちになつ

てきた。

店員は康介の丸めた饅頭を蒸し器に入れ、出来上がりと、ていねいに箱に詰め、紙袋に入れて、康介に差し出した。

「350円だよ」

そんなはずはないと思ったが、店員の口調には抗いがたい力があり、また康介の頭にも、自分のつくった饅頭を差し出したときの父の顔がすでに浮かんでいた。

康介は店員に礼をいって、店を出た。その頃にはもう田が落ちかけていたが、一刻も早く病院に饅頭を届けたかった。

しばらく行つて振り向くと、店員が外に出て、手を振っていた。康介は店員に手を振り返して、走り出した。

康介が持つてきた饅頭を見て、父は吃驚した。康介は得意になって、店でのできごとを話して聞かせた。饅頭を盗もうとしたことは黙っていた。饅頭が蒸しあがるのを待つて、店員にそういうわれていたからだった。

しかし、ぶざまに歪んだ饅頭を口に入れた父の目から涙が落ちるのを見て、康介はぎくりとした。秘密がばれてしまったのかと思つたからだ。

おいしくないかもしれないけど」と、父は何度も首を振つた。おいしい、おいしいといいながら、饅頭を次々と口に入れた。

変なの。康介は思った。お父さんたら、いつもは、男は泣いてはいけないといつているくせにさ。

病室の窓から見える空では、夕陽が沈みかけていた。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5312a/>

康介の饅頭

2010年10月8日15時12分発行